

戦地から観光地へ

——日露戦争前後の「満洲」旅行——

高 媛



「こゝは御国を何百里、離れて遠き満洲の、赤い夕日に照らされて、友は野末の石の下……」。日露戦争後、歌『戦友』の流行によって、満洲の印象は赤い夕陽の感傷とともに、戦友の骨を埋める戦場として当時の国民の脳裡に焼き付けられるようになった。

では、戦地としての満洲は、いかに観光地として人々の視野に入るようになったのだろうか。本稿では、日露戦争前までの満洲イメージの変遷を辿り、日露戦争中の観光旅行と、戦争終結直後に始まった利源調査の経緯を考察すること、満洲観光の前史を描き出したい。

一 日露戦争の前夜まで

一八世紀末、すでに「満洲」という言葉は、地名として日本の地図に登場していた。寛政六年（一七九四）に刊行された漂流民、大黒屋光太夫のロシア見聞談『北槎聞略』（桂川甫周編）を見ると、「満洲」と表記された訳図「亜細亜全図」が付されていたことがわかる。さらに、高橋景保が作成した「日本境界略図」（一八〇九年）と「新訂万国全図」（一八一〇年）にも「満洲」の地名が記されていた。

この頃、ロシアの南下に危機感を強めた幕府は、たびたび役人を北辺方面への探検・調査に派遣した。その命を受けた一人、近藤守重（一七七一〜一八二九）は、北海道、

千島方面まで足を延ばした。のちにまとめられた著書『辺要分界図考』（二八〇四年）によれば、「満州」を含む地域が、「古今未ダ其地理ヲ極ムル者ナク史冊及ヒ唐蛮ノ書ト雖モ未ダ悉ク其地理ヲ弁ズルモノヲ聞ズ蓋シ極北ノ絶海戎夷ノ巢窟耳目ノ常ニ見聞セザル所ナレバナリ」とされており、近藤が満洲を「辺界」のなかに取り込んでいたことを看取できる。同じく幕府から派遣された間宮林蔵（一七八〇〜一八四四）の口述記録『東韃（地方）紀行』（一八一一年）には、アムール川河口周辺の住民から朝貢品を受納する清国官吏の出張所「満州仮府」の様子が描かれている。この本は、満洲に関する旅の記録の濫觴といえる。

明治時代に入ってから、政府による満洲への軍事的関心は衰えることがなかった。明治五年（一八七二）、西郷隆盛の立案で実行された満洲視察の記録『満洲視察復命書』（一八八三年）を筆頭に、榎本武揚の『西比利亜日記』（一八八八年）、陸軍少将永山武四郎の『周遊日記』（一八八九年）などが相次いで記されている。これらの文献から、日清戦争に至るまでの満洲関係の情報は、主に軍人や政治家に握られていたことがわかる。

一八九一年、帝政ロシアがシベリア鉄道の建設に着手し、極東進出の布石を打った。同じ年、来日中のロシア皇太子ニコライが巡查に切りつけられるという大津事件が発生し、ロシアとの緊張が一段と高まった。そうしたなか、

一八九二年二月から翌年六月にかけて、ドイツ駐在武官の陸軍少佐福島安正（一八五二〜一九一九）が、任期満了後、一人で馬に乗りシベリア横断を敢行した。ベルリンからワルシャワ、モスクワを経て一路東行し、ウラル山脈、アルタイ山脈と興安嶺山脈を越え満洲に入り、ウラジオストクに辿り着く、一万四千里にも及ぶ「壮挙」である。福島は口述に基づいた旅行記『単騎遠征録』は、『大阪朝日新聞』で一〇〇回も連載されたのち、一八九四年六月に単行本として出版された。新聞や雑誌、旅行記のみならず、錦絵や双六、講談や壮士芝居に至るまで、当時の存在したあらゆるメディアが、福島はシベリア横断という稀有の話題に集中していたという。ちなみに、福島はその後、日清と日露の両役にて参謀を、一九一二年四月から一四年九月にかけて二代目の関東都督を務めた、満洲と縁の深い人物である。

日清戦争（一八九四〜九五五年）中、満洲関連の情報は、各新聞に掲載された従軍記者の報道や、開戦後まもなく創刊された雑誌『日清戦争実記』（博文館）などを通して、これまでにないほど大量に伝えられた。ところが、戦後、大衆雑誌『太陽』（博文館）の記事内容からも分かるように、三国干渉で遼東半島を手放すことになった国民は、その関心のをたちまち「新領土」台湾へと移していった。

再び満洲が朝野の話題に上ったきっかけは、シベリア鉄

道の一部となる東清鉄道の敷設である。シベリア鉄道の建設は、一八九一年に、ウラジオストクとハバロフスクを結ぶウスリー鉄道線から開始したが、日清戦争後、三国干渉により遼東半島を日本から清国に返還させた見返りとして、ロシアは、満洲域内を横切る鉄道（東清鉄道）の敷設権を清国に認めさせた。一八九八年に正式に着工した東清鉄道は、表向きは露清両国の共同事業であつたが、実権はロシア側が握っていた。

東清鉄道の敷設は、ロシアの南下に対する脅威を日本人のなかに一層募らせるとともに、日本人探検家の注目をシベリアから満洲へと転じさせた。これまでの旅行記のタイトルには「シベリア」が多用され、満洲はコースの一部に過ぎなかつたが、この時期になって、初めて「満洲」が独立した旅行先として人々の視野に立ち現れるようになった。

その代表的な作品は、一九〇一年に出版された『満洲旅行記——一名白山黒水録』である。一八九八年四月から五月まで、そして一八九九年四月から七月までの二回にわたり、日清戦争中に海軍軍人であつた探検家小越平陸が満洲を踏査し、東清鉄道を梃子に着々と推進されたロシアの満洲経営の実状を詳細に伝えた。刊行からわずか一年で、早くもその抜粋が『中学国語教科書』に収録されたほど、『満洲旅行記』は好評を博した。

満洲三省を旅行して何物か最も満洲に於ける最大の動機たり最大の顕象たるかを思考するに満洲鉄道の敷設に過ぐる者あらし満洲鉄道の敷設は満洲旅行者の目に映ずる最大の顕象にして此の最大顕象は現今に於ても各事物の動機となり将来に於て更に最も大なる動機たらんとす之を譬ふれば露国は満洲なる一大貨車を自家の倉庫に運び去らんが為に目下孜孜とし東清鉄道てふ一大機関車に点火しつゝあると云ふべし。

ここでは、東清鉄道の重要性が強調されるとともに、満洲が「一大貨車」に例えられたところが興味深い。「満洲の平原」「牧畜」「物産」「鉱山」などの項目や、「満洲は土地広大にして肥沃其山嶽に於ける森林鉱物禽獣藥品其江河に於ける魚鱉其原野に於ける穀類、豆類、菜類、瓜類甚だ多し」といった記述からもうかがえるように、満洲は、もはや一世紀前の「辺界」のイメージとは程遠く、ロシアに狙われるだけの「富源」の地として描かれているのである。

小越平陸も調査委員として関係している右翼団体黒龍会は、早くから積極的に会員を満洲方面へ派遣し、情報収集に努めていた。一九〇一年四月、「邦人の満洲に於ける地理的頭腦を開拓」するため、黒龍会は『最新満洲図』を発行した。しかし、このような満洲旅行は、ロシア側の妨害によつて困難なものとなりつつあつた。一九〇一年八月の

機関誌『黒龍』には、「満州ばなし（殖民しよふじやないか）」と題される一文が掲載されている。この筆者は「先づ殖民を満洲にやるとして夏避暑すべき軽井沢や日光に換ゆべき好山川はあるかと云ふに、満洲全部が避暑地として無類である」と述べたあと、「露国西亜比利亚駐在官吏は在浦汐我貿易事務官に向つて公然通知し、満州未だ賊徒の沈静を見ぬから、外国人の旅行を禁ずると、此の通知は露国が発すべき者でなく当然清国政府が列国領事に致すべき通知である、然るを満洲の秩序に就いて露国が我駐在官に通告し来るは異様な感じがする、何時満洲は露国に割譲せられた者にや」と異論を唱えた。そして、「アノ富有なる殖民に適當なる満州も己に他人の有ならんとし、彼の豆類は日本農産物の肥料として欠くべからざる者であるが已に業に如斯、やつはり豆殻大の国にグル舞ふて同土討ちするが日本人の天職乎も知れぬ」と感嘆を示している。

「避暑地」に最適な満洲への旅行はロシア側に封鎖され、「豆類」に恵まれる満洲の富源も東清鉄道で持ち去られて行く——ここにおいて、「避暑地」も「富源」も、すべて、「殖民・領有すべき満洲」への欲望を支える、意味ある「風景」として語られていたのである。

一九〇一年末、東清鉄道はついに全線竣工し、〇三年七月をもって正式に営業を開始した。一九〇二年八月から一月にかけて、東京帝国大学教授の戸水寛人（一八六一—

一九三五）は、試運転中であつた東清鉄道に乗ってウラジオストクから満洲に入り、さらにハルビンより旅順へと南下し、その後天津、北京、青島、韓国などを経て帰国した。

雑誌『日本人』（政教社）一九〇三年新年号に、戸水は「青年諸子に海外旅行を勧む」という文章を寄稿し、「行途長遠」かつ「多くの日月」を要する欧米方面よりも「東洋諸国」へ旅立つよう呼びかけている。

是れ故に在学せる青年の暑中休暇に際して箱根の山中に起臥するよりは寧ろ進みて浦鹽斯徳に避暑的旅行を試むるを可とす、敦賀より発船して浦鹽斯徳に行く、唯だ僅か二昼夜を要するのみ、九州より朝鮮に行く、支那に行き、若くは旅順、ダルニーに行く、亦た単に数日を費せば足る、奮起してかゝる外地に赴き以て其地の事情を視察する者の続々接踵せんことこそ望ましけれ。而して若し太陸に出游して視察する所あらんとする、即ち東清鉄道あり、万里長城あり、此等は唯だ一覽するのみにて尚ほ心身を壮大ならしむるの効あるべし、況や其の以外に於て観る所のもの必ず少からざるべく、依りて得る所ある亦た必ず多かるべし、敢て世の青年諸子に向ふて海外旅行を勧むることを爾

かり
ウラジオストク、旅順、ダルニー、東清鉄道、万里長城

……戸水がこれらの場所を青年諸子の海外旅行先として薦めたのは、単に緯度的に避暑に適しているからだけではない。前年の自分の旅行経験を念頭に、ロシアの満洲進出の歩みをこの目で確認するようにとのメッセージを送っている。

『日本人』への寄稿から二か月後に出版された著書『東亜旅行談』の中で、戸水は「満州ハ真二名ニ於テ露西亜ノ領土ト思ハレル位デス」と嘆き、山海関で心強く感じた日本軍の「偉大ノ勢力」に感激し、「満州ニ日本兵ヲ入ルレバ皆此通ニナルノデセウ」と強く訴えた。

本の刊行から三か月後の一九〇三年六月一〇日、戸水をはじめとする「七博士」は、日露開戦論を盛んに唱え、対露強硬の建議書を政府に提出した。いわゆる「七博士事件」である。日露戦争前夜に行われた満洲旅行は、戸水を強固な主戦論者に作り上げる決定的な経験であったといえる。

二 日露戦争中の「観戦旅行」

開戦から四か月が経過した一九〇四年六月、日本政府は旅順陥落の日を予測し、それに合わせて、国内外の名士を載せた初の観戦船「満州丸」を横須賀より出航させた。三宅雪嶺の述懐によると、満州丸は二人の海軍中佐を監督と

し、便乗者には、貴族院議員六人、衆議院議員九人、イギリス、ドイツ、アメリカ、スウェーデン、ノルウェー、イタリア、フランス、オーストリアの外国公使館の武官一人ずつ、外国軍事通信員一〇人、国内の各大新聞の記者一五名、ほかに学者、画家、作家など錚々たるメンバーを加えていたという。

『日本風景論』で有名な地理学者志賀重昂（一八六三—一九二七）も便乗者の一人であった。ジャーナリスト、評論家、衆議院議員、大学講師など多彩な顔を持つ志賀は、戦史専門家の記録とは異なる、戦争の「側面観察」を伝えるようなという動機で、観戦旅行に参加したのである。

観戦に利用された船「満州丸」は、真つ先に志賀を感慨に浸らせた。この船はもともと、開戦の劈頭、日本海軍が捕獲したロシアの汽船「マンチュリア号」である。彼は、日本名「満州丸」と塗りかえた戦利品に乗船しての観戦が、日露の国運の盛衰を象徴していると感じた。

特に船頭に露字にて「マンチュリア」と刻せるもの黒く之れを抹し去り、金字にて邦語「満州丸」と大書し、抹されたる露字の面影臆気に残り、邦字の金色頃に燦爛とし、国運の隆昌と映発する概ある處、全くの詩料なり、此間に無限の変遷あり、不言の大歴史あり、世界の荒廢に繋がり、今古の消長に關す、以て千歳の詩料となすに足れり。

船内には、郵便函、酒保、浴場、洗濯人、小間物屋、理髮師、さらに東京精養軒より雇ったボーイ数十名も待機するなど、サービスが周到に整えられていた。また、戦地の出来事を瞬時に伝える無線電信まで設置されており、同行の将校はそれによって伝えられた情報をもとに、各国語で戦況を解説した。観戦船のなかは、乗客の目を見張らせるものばかりであった。

巡航は四〇日間をかけて、呉市の造兵廠をはじめ、江田島の海軍兵学校、松山市のロシア捕虜收容所、佐世保の造船部などを廻り、戦勝を支える武備の完全さと捕虜優待の人道意識の高さをアピールした。

出航から三日後の六月一五日、ウラジオストクのロシア艦隊が対馬海峡で常陸丸と佐渡丸を撃沈したため、満州丸の日程も変更を余儀なくされた。²⁰二二日、乗客一行は朝鮮に向かい、仁川上陸後、京城、鎮南浦、平壤へと北上した。京城で韓国皇帝の歓待を受けた際、志賀は「若し日本にして今日の反対の境遇にあらしめなば、豈に此日此境あらんや」と「日本帝国の威力」を改めて実感した。さらに、平壤にある日清戦争の跡を偲びながら、「曾て是れ高麗及び李朝の興廃、日清の成敗に関はり、今回の戦役亦た我が陸軍の初めて露兵と砲火を交へたる處、人をして画の如く詩の如く覚えしむ」と感慨に耽っていた。巡航中、日露戦争で撃沈された双方の戦艦の残骸を眺めたただけでな

く、一〇年前に清艦を破った海域や、豊臣秀吉の時代に韓艦と対戦した場所まで逐一確認した。

旅順陥落が当初の予定より長引いたため、聯合艦隊司令官東郷平八郎は、満州丸便乗者の空しく内地に帰航することを遺憾とし、水雷艇を派遣して聯合艦隊の前進根拠地・裏長山列島（関東州近辺）に在泊中の三笠艦に乗客を迎え、会見を行った。²¹戦闘艦、巡洋艦、駆逐艦、水雷母艦など大小の艦船数百隻を目にして、志賀は思わず「檣の森の如く列り煙突の柱の如く立てるは誠に壯觀なり」と感嘆した。そして、漁業に未熟な清国人が艦隊を相手に鯛を売っているのを見て、「須らく今日より準備し、戦後に当りては、此間の漁業を大に経営せざるべからず。將た又た戦後、此辺にして依然支那の領海となり居れば、当局者は遼東地方の漁業権將た通漁権を我に得取せしむる様、今よりして仔細に考慮し置かれんことを要す」と、漁業の可能性と戦後の利権確保にまで思い至ったのである。²²

海軍の根拠地を中心に廻った「観戦旅行」は、鉄砲の音を聞くことも遼東半島の戦地を踏むこともなかった。だが、志賀にとつては、「日本国威の反照」を実感させ、「戦捷の淵源」に思い至らせた「戦後経営」の可能性さえも予感させる旅となったのである。

満州丸の旅からわずか一か月後、志賀は政界での豊富な人脈を活かし、旅順口攻囲軍に従軍する特別許可を得た。

当初二週間の予定を半年間まで延期させ、二〇三高地、東鷄冠山北砲台での激戦を「観戦」し、さらに旅順開城を見届けたあと、一九〇五年一月下旬に帰国した。

満州丸の観戦体験と旅順攻囲軍での従軍体験の両方を持つ志賀には、各府県の教育会、学校、社交団体から講演依頼が殺到した。志賀は「国民の敵愾心は一層振興せしめざるべからず」として講演行脚を行った。四月一六日から六月二三日までの六九日間で計五八回、一日三回講演したこともあり、一回の来聴者は最多三千人にも達した。「大役小志」には、四一回分の講演会の内容が掲載され、時期は一九〇五年一月下旬から八月に樺太視察に赴くまでの七か月間と思われる。そのうち、教育関係が二二か所（うち学校一八か所、教育会四か所）で半分以上を占め、ほかには社交団体一七か所、宗教団体二か所である。講演の内容は、観戦旅行や旅順攻囲戦の見聞から「関東半島開発の方法」、「大連渡航の葉」のような戦後経営の指針に至るまで多岐にわたっている。ここからは、個人の満洲見聞を積極的に社会に広める志賀の意欲と、社会各界（とりわけ教育界）が満洲に抱く熱い関心をうかがうことができる。

志賀も参加した第一回観戦旅行から半年後、一九〇五年一月二日の旅順開城に合わせて、衆貴両院議員を乗せた第二回満州丸観戦旅行団も旅順入りを果たした。同じころ、『読売新聞』には、立法の任を担う政治家の観戦旅行は意

義あるものとした上で、「何が故に特に政治家のみに此便宜を與へて、国民教導の大任ある教育者をも其列に加へざるや」とし、精神教育上重要な意味を持つ「旅順要塞の实地」を、教育者にも見学させる方便を与えるべしと主張する社説が掲載された。

責めてハ、師範学校、中学校並に之と同等以上なる各学校の校長、教頭、或ハ其職員中より、適當の人物を選び、現に衆議院議員に與へつゝある其方法を斟酌し、此千古未曾有の戦場を一覽せしめんとするに在り、斯くて要塞築造の大体より、之に要する所の經費、及び攻守両軍苦戦の跡等、各々实地に就て之を説明せば、教育家の得る所ハ、単に軍事上の知識に止まらず、第一我勇武なる將校士卒の、其精神の確乎として、且つ戦術に長ずることを自覚し、史上の楠新田を眼前に見るのみならず、更に我國物資上進歩の如何を知り、加之軍事財政教育の各方面に於て、世界に對する我邦地位如何をも察すべく、是等諸般の事実にして、一度び教育者の耳目に触れんか、其感想ハ忽ちに幾千万学生の脳裡に伝はり、直接教育上の利益を與ふるのみならず、延てハ政府の政略にも、少からざる好結果を與ることとなるべし。

この社説からは、二つ重要なメッセージを読み取ることができる。一つは、旅順という苦戦の跡を、単に軍事上の

要所として捉えるのではなく、国民教育の道場として活用できる可能性が示されていることである。ここで見出された満洲戦跡の教育的価値は、のちに満洲への修学旅行を支える重要な理念となる。もう一つは、「観戦旅行」の恩恵は概ね政治家だけに限定され、教育者層やほかの階層にまで及んでいなかったことである。このような旅行拡大化の訴求が上がったことは、ある意味で、観戦旅行が満洲旅行への関心を広く社会に惹起したことを浮き彫りにしている。

満洲丸の乗客以外にも、陸軍省に満洲視察の願書を提出し、御用船と鉄道への便乗や宿舍の提供など便宜を享けた「観戦議員」が少なからずいた。『読売新聞』が提言した、教育者の観戦旅行は戦後に持ち越されてしまったものの、大阪府堺中学校のように、満洲帰りの地元代議士を講演会に招き、その旅行談を校友会誌に掲載するなど、政治家の持ち帰った土産話は教育界にも伝わり広まることが可能であった。

三 戦勝後の「利源調査」

東清鉄道の敷設によって日露開戦前から流布されてきた「富源」満洲のイメージは、日本の戦勝が確実になるにつれ、利源獲得と戦後開発への期待感につながった。戦争中

すでに『富の満洲』や『満洲案内——東亜の大宝庫』などの書物が出版されていたが、日露講和条約が締結されるや、あたかも戦勝で獲得できなかった賠償金を満洲の利源によって取り戻そうとするかのように、『実業の満洲』『最近調査満韓之富源』『満韓利源調査案内』『満洲富源案内』といった指南書が相次いで刊行され、満洲への進出欲は一層高まった。実業之日本社の月刊誌『写真画帖』は、一九〇五年一二月に『満韓写真帖』と題し、四八頁にわたる『満韓渡航案内』の附録を組んだ。その巻頭言に、

満韓は日露開戦の動機にして、我國民の千秋万古、紀念すべき最重要地点たるのみならず、満洲は我名譽ある帝國軍人が國家の為に百艱を排して前古未曾有の成功を築ける處、加ふるに戦勝の結果として、我に取めたる權利富源亦少しとせず、乃ち今後我勢力圏域として經濟上大發展を要する處たり。

と、戦勝の恩恵である「權利富源」への開発熱を煽り立てている。

一方、日露戦争が終盤に近づくと、満洲軍内部からも「富源調査」の必要性を唱える声が高まった。一九〇五年五月一九日、歩兵中佐西川虎次郎が、東京の大本営から遼東兵站參謀長に着任した。七月二一日、西川は各兵站司令官宛の文書の中で「満洲ノ富源ヲ開發シ戦後収利ノ基礎ヲ確立スルニハ先ツ満洲ヲ世人ニ紹介致度候ニ付從來其地ニ

於テ調査シタル滿洲ノ制度、沿革、土地、政治、物産、戸口、運輸、交通、人情、風俗、習慣等ニ関スル調査ニシテ参考トナルヘキモノハ文章ノ巧拙ハ固ヨリ論スル所ニ無之候間此際至急御送附相成度候也」との見解を示し、担当の調査係に、待命中の兵站司令部要員の陸軍通訳を充て、各項目を分担して調査させるという具体的な事務規程も提示した。⁽³⁰⁾

それから約一か月後の八月一八日、西川の上司である遼東兵站監部兵站監・井口省吾陸軍少将は、滿洲軍総司令官大山巖宛に「滿洲ノ富源調査ノ義ニ付意見具申」を送付した。

和議締結後ニ於ケル滿洲ニ対スル我政府ノ方針如何ニ関セス滿洲富源ヲ開發シ我利權伸張ノ基礎ヲ確立スルハ極メテ緊要ナルコトニシテ之カ為メ先ツ滿洲ノ実態ヲ調査シテ速ニ世ニ公ニシ世人ヲシテ其依據シ得ヘキ指鍼ヲ與フルハ目下ノ急務ト信シ候

と、冒頭で「富源調査」の緊要性が強調されたあと、井口は、調査に兵力の保護が必要であることと、調査が遅延して結氷期に至れば「鉱山探査、農商又ハ水路ニヨル商業等ノ調査」に不便が生じることから、「専門ノ学識ヲ有スル技師又ハ經驗アル実業家及若干ノ通訳」を派遣し、速やかに着手すべきことを強く訴えた。⁽³¹⁾

西川の文書から井口の具申までわずか一か月しか経過し

ておらず、しかも「滿洲ノ富源ヲ開發シ戦後取利ノ基礎ヲ確立ス」と「滿洲富源ヲ開發シ我利權伸張ノ基礎ヲ確立ス」といった箇所は非常に似ていることから、井口は部下の意見を参照した可能性が高いと考えられる。しかし、「富源」の捉え方と実践方法については、西川から井口までに大きな方向の転換が見られた。まず西川が、調査の対象について、「滿洲ノ制度、沿革、土地、政治、物産、戸口、運輸、交通、人情、風俗、習慣」と、歴史的、文化的資源をも視野に入れての対して、井口は「鉱業探査」「農商」「水路ニヨル商業」など「実用的觀察」を強調していた。具体的な取り組み方についても、西川は現に滿洲軍に配属している通訳を調査係に担当させようとした一方で、井口はむしろ、内地の關係省庁から各分野の専門家と実業家の派遣を望んでいた。

井口の意見具申は、早速八月二〇日に滿洲軍総參謀長児玉源太郎を通して陸軍參謀次長長岡外史に、さらに同月二九日に長岡經由で陸軍次官石本新六に移牒された。そして四日後の九月二日、陸軍大臣寺内正毅より、関東州民政署（滿洲軍総司令部の管下、一九〇五年六月二三日大連に設置）の民政長官石塚英蔵宛に電報が送られた。滿洲富源調査計画を民政署に担当させるとの閣議決定を伝えたいうえ、井口兵站監と協議し、調査員の派遣に関する詳しい意見を具申するよう求めた。⁽³²⁾

計画は、日露講和条約の締結をはさんで、関東州民政署の指揮のもとに急ピツチで進められた。九月一六日、民政長官石塚英蔵は井口兵站監宛に「同署ニ於テ滿洲富源調査掛ヲ新設シ高等官三十一名、判任官三十三名通訳二十八名ヲ以テ組織シ通訳ハ現ニ滿洲軍所屬ノ者ヲ転属セシメ期日ハ十月ニ始リ十二月ニ結了ノ見込」の電報を送り、同じ日に、陸軍大臣宛に、調査事項、調査地域、予算について詳しく報告した。「専門家及実^テ家ハ成ル可ク各省ヨリ所屬官吏又ハ其推薦ニ係ル」と調査員の派遣を要請し、関東州民政署の予算から「臨時滿洲利源調査費」として、六万三千七〇〇円を支出することについても指示を仰いだ。

このように、「滿洲利源調査」は、遼東兵站監井口省吾によって発案されてからわずか一か月の間に、陸軍省の肝いりで、関東州民政署民政長官石塚英蔵の指揮と、各省庁の協力のもとに、大至急着手されたのである。

一〇月から一二月にかけて、農商務省、大蔵省と関東州民政署から集められた約百名の調査員が、農業、林業、商業、工業、水産、鉱山の五班に分かれて調査を実行した。井口の意見具申や石塚民政長官の電報からもうかがえるように、滿洲利源調査計画は当初から、実業家の参加を視野に入れていた。一〇月三日、民政長官は、陸軍次官宛の電報で再び、「尤モ屈指ノ実業家」の勧誘と関係省庁への協議を依頼した。「商工ノ部中ニハ前電ニモアル如ク実業家ヲ

モ加ヘ度意見ナリ依テ予定人員ヲ繰合ノ上実業家若干御加入有度尤モ屈指ノ実業家ニシテ自費ニテ調査希望ノモノアラハ此際予定ノ調査員ト同行視察セシムルヲ便ト思考ス」。その際、旅費や手当の支給は予算の関係で支出し難いが、御用船、鉄道の便乗、兵站の宿舎などの便宜を図ることは可能だと約束した。農商務省が陸軍省の依頼を受け、滿洲利源調査について声をかけたところ、全国から千名を超える希望者が出たという。折しも各地で滿洲軍が撤兵を始めており、これほど大勢の人に便宜を図るのは難しいとの判断から、実業家のほとんどは渡航を翌春以後に見合わせた^②が、前後合わせて計六〇〇余りの実業家が第一回滿洲利源調査員として滿洲行きを許可された。

そのうちの一人、東京市で貴金屬業に従事する村松万三郎は、一九〇六年三月一五日から五月三〇日にかけて、奉天以南の滿洲と芝罘、天津、北京を廻ったあと、「滿洲ニ於ケル貴金屬製作工業調査報告」を作成し、農商務省に提出した。村松は、滿洲の現状を「製造工業ヨリ需要者ノ程度迄幼稚ノ境ヲ脱セサル有様ニテ」、「恰モ本邦維新前ト同様ニシテ」と評したうえ、「本邦ノ開発ハ将来必ズ需要ノ程度高尚ナルベキハ本邦ニ於テ維新以來漸次嗜好ノ変遷ニ従上昇シタルト同一轍ナルベシ」と、滿洲進出の可能性を見出している。そして、調査の結果、「國家ノ為メニハ自前ノ利益ニ汲々タルガ如キ事ヲナザズ将来ノ發展ヲ期シ

テ、早速大連と營口の二都市に「万松号老牌」という看板の支店を設置し、遼陽と奉天まで出張販売を実施する準備に着手した⁽³⁷⁾という。二か月半にわたる利源調査旅行は、村松に満洲経営の決断を促し、進出の第一歩を踏み出させたのである。

一九〇五年の第一回目の満洲利源調査が、実業家の希望者全員の要望をかなえることができなかつたためか、軍政から民政に移行する前の一九〇六年六月末から七月上旬にかけて、農商務省の囑託で各府県から推薦された実業家七〇〇名を中心とする第二回満洲利源調査が実施されることになった⁽³⁸⁾。二回目の調査員にも陸軍省から「便乗許可証」が下附され、御用船や鉄道の便乗、兵站宿舍の利用など、前回と同様の便宜が図られた。そのほか、県から多額の補助金を供与される人も少なからずいた。このような「大名旅行」の機会に恵まれた調査員たちが羨望と嫉妬の的となつていたのであることは容易に想像できる。

満洲現地の邦字新聞『満州日報』（營口）は、彼らの姿を次のように揶揄している。

調査事項の復命書が満足に出来るや否所で委員先生遼陽に一泊、早は朝来晩発まるで喇嘛塔の見物に過ぎぬ、苟も利源調査と云ふ名目に対し踏査精究するの責ある委員が、朝来晩発尿糞を遺するか能であるまい、尠くとも遼陽の調査事項に三四日費すは至当である、

或る役所など委員の為便宜を與へんと待構へおるに、一人も顔を出すものないとの事、イヤハヤ片腹の痛き次第である⁽³⁹⁾。

また『大阪毎日新聞』は、満洲から帰つたばかりの大阪府学務署顧問の話を紹介して、学生の満洲旅行は「夫の利源調査など唱へて徒に大形名刺のみを振廻して其結果排日熱を煽りたるの嫌あるデモ紳士連の視学に比して寧ろ大なる効果を齎らし帰ることならんと信ず」と、清国人から反発を招いた利源調査員の横柄さを批判した。こうした非難の高まりをうけ、関東都督府は、ついに農商務省を通じて各府県知事に通牒を下し、「人物の選定に就き一層注意」を払うことと、清国人からの反感を招きかねない「利源調査」に代わる「商業視察」の名称使用を要望した⁽⁴⁰⁾。

調査員の振る舞いに向けられた厳しい視線は、満洲の利源開発に対する輿論の注目度の高さを逆照射するものとなった。調査員の出発から帰郷までの動向を詳細に報道するだけでなく、『山陽新報』（岡山県）のように、長い調査報告を全篇連載する新聞さえあった⁽⁴¹⁾。また、調査員は帰国後、農商務省や県庁宛に正式な調査報告の提出が義務づけられていた。このように、一人の実業家の利源調査旅行は、新聞記事を通して、満洲開発欲に燃える社会を加熱し、また復命書を通じて地方自治体と国家の対外政策の決定に関与するようになった。

結びにかえて

日本は江戸後期から一貫して、軍事的、国防的な関心を満洲に注いできたが、シベリア鉄道の満洲区間・東清鉄道の敷設を契機に、満洲イメージは「辺界」から「富源」へと大きく転換した。「富源」は、「植民・領有すべき満洲」への欲望を支える、意味のある「風景」として語られ、軍事的危機感、ロシアに持ち去られる「富源」への痛恨の念から、一層煽り立てられることになった。

日露開戦から四か月が経過した一九〇四年六月、政治家や外国武官、内外の名士を対象とした「観戦旅行」が催行された。第一回満洲丸観戦巡航は、主として海軍根拠地やロシア捕虜収容所、朝鮮と満洲の一部を廻り、完全なる武備と人道的な捕虜待遇を内外にアピールした。この旅で「日本国威の反照」、「戦捷の淵源」と「戦後経営」の可能性を実感した志賀重昂は、一か月後、陸軍への従軍を希望し、旅順攻囲軍の戦闘をより身近に観戦することができた。帰国後、志賀は講演会や著書などを通して、満洲見聞を社会に広める活動を意欲的に行った。志賀ほどでなくても、観戦旅行の特権を与えられた政治家たちは、各地の講演会に招かれるなど、満洲情報の貴重な発信源となった。

戦争が終盤を迎えると、次第に「戦後経営」への欲求が

高まり、とりわけ一九〇五年九月に日露講和条約が締結されると、日本中が満洲利権の開発に熱をあげた。一九〇五年末と翌年の夏に、陸軍省の肝いりで「満洲利源調査」が二回行われた。一回目は、各省庁から派遣された技術官による政府主導の専門的な調査であったが、二回目は各府県から推薦された実業家中心の利源調査であった。戦時中、政治家だけに限定されていた便乗旅行の恩恵も、ついに満洲進出に熱心な実業家層にまで拡大するようになった。満洲利源調査は、実業家個人の満洲見聞を広め、満洲進出を促したばかりでなく、新聞報道や復命書を通して、地方自治体と国家の対満政策の決定にもリンクしていった。

本稿で叙述した日露戦争前後の満洲旅行が持つ意味は、次の三点に要約することができる。

まず、満洲情報源の拡大である。日露戦争前まで、満洲をめぐる情報は主として、探検・踏査を敢行した軍人や大陸浪人に握られていた。戦時中の観戦旅行や戦後の利源調査によって、政治家やジャーナリスト、実業家も満洲情報の発信源として成長し、新聞報道や講演会などを通して、満洲情報をより広く社会に伝播するようになった。

二点目は、帝国のまなざしの生成である。観戦旅行と利源調査に現れた帝国のまなざしを、戦跡・国威・富源という三つの語りにまとめることができる。まず、満洲丸での観戦旅行が、志賀重昂に「日本国威の反照」、「戦捷の淵

源」と「戦後経営」の可能性を実感させた。また、『読売新聞』は旅順開城直後の二回目の観戦旅行に触発され、教育家にも旅順観覧を行わせるよう要望し、旅順の持つ国民教育の道場としての価値を明確に指摘している。そして、開戦前から流布されていた「富源」のイメージは、戦時中、利源獲得と戦後開発への期待感につながり、さらに戦後の利源調査の計画にも継承されていた。戦跡・国威・富源は、のちに日本人観光客のまなざしの中にも反復され、満洲観光の重要なテーマとなった。

三点目は、満洲観光気運の醸成である。日露開戦以降の観戦旅行と終戦直後の利源調査は、確かに軍や政府主催の一部の特権階級に限定された旅行ではあった。一方、羨望と嫉妬の的であるこれら特権者の存在は、社会一般に満洲旅行のステータスをアピールし、満洲を股にかける大衆の欲望を誘い出すことに成功し、満洲観光誕生の気運づくりに大きく寄与するものとなった。

一九〇六年七月、満洲観光の嚆矢といわれる東京・大阪両朝日新聞主催の「ろせつた丸満韓旅行」や、文部省・陸軍省主催の「満洲修学旅行」も、まさにこのような気運の高まりの中で誕生した。

注

〔1〕現在の中国東北地方。戦前の日本語文献では、「満州」と「満洲」の両方の表記が用いられていた。本稿では、戦前に多く使われていた「満洲」に表記統一するが、引用にあたっては、原文の表記にしたがうものとする。

〔2〕中見立夫「歴史のなかの『満洲』」『環』第一〇号、藤原書店、二〇〇二年、八三頁。

〔3〕大谷幸太郎「辺界」から「大富源」へ——日露戦争前夜の満洲ヴィジョン——『比較文学』第三八巻、日本比較文学会、一九九五年、九三頁。

〔4〕間宮林蔵述、村上貞助編、洞富雄・谷澤尚一編注『東鞭地方紀行』平凡社、一九八八年、一三五—一四八頁。

〔5〕田口稔『満洲地理点描』満鉄社員会、一九三九年、三七—四〇六頁。

〔6〕西村時彦(天囚)編、福島安正閔『単騎遠征録』金川書店、一八九四年。

〔7〕原山煌「福島安正のシベリア単騎旅行に関する大衆メディアの諸相——絵図をめぐる——」(平成一三・一四年度科学研究費補助金特定領域研究(A)(2)「東アジアの出版文化」研究成果報告書)、二〇〇三年。

〔8〕『日清戦争実記』は、開戦よりわずか二四日後の一八九四年八月二五日に博文館によって創刊され、翌々年一月まで計五〇編発行されていた。

〔9〕劉建輝『満洲』幻想の成立とその射程』『アジア遊

学』第四四号、勉誠出版、二〇〇二年、五一六頁。

〔10〕小越平陸「露西亞人の新都會」和田万吉編『中学国語教科書』文学社、第九卷第三課、一九〇二年二月。田坂文穂編『旧制中等教育国語教科書内容索引』教科書研究センター、一九八四年、七五頁。

〔11〕小越平陸『滿州旅行記——一名白山黒水録』善隣書院、一九〇一年、六一七頁。

〔12〕同右書、一八〇頁。

〔13〕『黒龍』第一卷第一号、黒龍會、一九〇一年五月、七六頁。

〔14〕フンフーザ「滿州ぼなし（殖民しよふじやないか）」

『黒龍』第一卷第四号、黒龍會、一九〇一年八月、五九—六四頁（傍点は原文のまま）。

〔15〕南滿洲鉄道株式会社哈爾濱事務所運輸課編『東支鉄道を中心とする露支勢力の消長』上巻、南滿洲鉄道株式会社、一九二八年五月、五二頁。

〔16〕戸水寛人「青年諸子に海外旅行を勧む」『日本人』第一七八号、政教社、一九〇三年一月、二二頁。

〔17〕戸水寛人『東亜旅行談』有斐閣書房、東京堂、一九〇三年、一二六、二〇四頁。

〔18〕三宅雪嶺「雪嶺自伝」『明治文学全集』第九八巻 明治文学回顧録集(-)、筑摩書房、一九八〇年、一六四頁、一滿洲丸觀戰談片」（小笠原中佐談）、『読売新聞』一九〇四年七月二八日。

〔19〕志賀重昂『大役小志』東京堂、博文館、一九〇九年、

一一二頁。

〔20〕三宅、前掲文、一六四頁。

〔21〕志賀、前掲書、一九、六四頁。

〔22〕三宅、前掲文、一六四—一六五頁。

〔23〕志賀、前掲書、七七—七八頁。

〔24〕志賀、前掲書、「例言」三頁、四〇—三六八五頁。

〔25〕社説「教育家の旅順觀覽（是非とも実行すべし）」『読売新聞』一九〇五年一月五日（傍点は原文のまま）。

〔26〕「戦地視察許可の代議士」『読売新聞』一九〇五年五月六日、「觀戰議員の待遇に就て」『読売新聞』一九〇五年五月七日。

〔27〕一九〇五年五月一八日から七月六日にかけて、滿洲を視察した大阪府代議士・中林友信は、七月一日に、大阪府立堺中学校で講演した。のちに講演の内容は、一滿洲視察談」として、同校の校友会誌『芽浮の海』第一七号（一九〇五年二月）と一八号（一九〇六年七月）に連載された。松本政春「日露戦争と堺中学校」大阪府高等学校社会科研究会『社会科研究』第三七号、一九九四年、八頁。

〔28〕松本敬之『富の滿洲』言文社、一九〇四年、今井忠雄『滿洲案内——東亜の大宝庫』実業之日本社、一九〇四年、坂本箕山『実業の滿洲』集成堂、一九〇五年、西村駿次・山崎寛猛『最近調査滿韓之富源』内外興業社、一九〇六年、茅村行客・今井忠雄編『滿韓利源調査案内』独立堂奥出書店、一九〇六年、『滿洲富源案内』遼東新報社、一九〇六年。

〔29〕「発刊の辞」『滿韓写真帖』（「写真画帖」第二三編）実業之日本社、一九〇五年二月。

〔30〕『明治三十七八年戦役滿洲軍政史』第一卷、陸軍省、一九一六年、一九一、一〇四九頁。

〔31〕同右書、一〇四九—一〇五〇頁。

〔32〕「滿洲利源調査員所要経費に関する件」明治四一年「滿大日記六月上」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref: C03027622500（画像三二—三九）、陸軍省—陸軍省大日記（防衛庁防衛研究所）。

〔33〕前掲『明治三十七八年戦役滿洲軍政史』第一卷、一〇五—一〇五四頁。

〔34〕前掲『滿洲利源調査員所要経費に関する件』（画像八九—九一）。

〔35〕『滿洲産業調査資料』各巻、巻頭言、関東洲民政署、一九〇六年、七—八頁、平野健一郎『滿洲産業調査』（一九〇五年）について—近代日本研究会編『幕末・維新の日本』（『年報・近代日本研究』第三巻）山川出版社、一九八一年、四三—三頁。

〔36〕『岐阜日日新聞』一九〇六年七月六日。

〔37〕「滿洲利源調査員村松万三郎より視察報告書提出の件」、一九〇六年六月—五日、明治三十九年「滿大日記六月下」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref: C03027164500、陸軍省—陸軍省大日記（防衛庁防衛研究所）。

〔38〕「滿洲利源調査員出発期」『読売新聞』一九〇六年六月一九日。なお、利源調査に参加した実業家の顔ぶれについて、

て、吉良芳恵「日露戦後の『滿洲利源調査』と浦賀」『市史研究横須賀』第四号、横須賀市総務部総務課、二〇〇五年三月、一—一頁を参照されたい。

〔39〕「遼陽の利源調査委員」『滿州日報』一九〇六年七月二—一日。

〔40〕「滿洲の教育」『大阪毎日新聞』一九〇六年七月二—一日。

〔41〕「滿洲視察の注意」『静岡民友新聞』一九〇六年八月三日。

〔42〕田中愼一によれば、『山陽新報』は、岡山県の滿韓利源調査員に関する記事を多く取り上げ、調査報告を一九〇六年八月七日から一五日にかけて六回に分けて連載した。またこの調査が「滿韓起業諮問会」の開催と韓国農事奨励組合の成立につながり、岡山県の対外政策に深く影響を及ぼしていることも明らかになっている。田中愼一「滿韓視察員と韓国農業奨励組合」『北海学園大学経済論集』第三八巻第二号、北海学園大学経済学会、一九九〇年一二月、四七—六九頁。

〔43〕有山輝雄「海外観光旅行の誕生」吉川弘文館、二〇〇二年、及び拙稿「新天地」への旅行熱(上)——「滿韓巡遊」から「鮮滿の旅」へ、「観光文化」一五〇号、日本交通公社、二〇〇一年—一月、「新天地」への旅行熱(下)——「観光楽土」に第一步を、「観光文化」一五一号、日本交通公社、二〇〇二年一月、「楽土」を走る観光バス——一九三〇年代の『滿洲』都市と帝国のドラマトゥルギー」吉見

俊哉ほか編『拡大するモダンテイ』（岩波講座『近代日本の文化史』第六卷）岩波書店、二〇〇二年、「満洲修学旅行の誕生」『彷彿月刊』第一九卷八号、弘隆社、二〇〇三年七月などを参照されたい。